

天下無敵の I love you

プロローグ

出会いは、四月の入社式。

——うつつ、緊張するなあ……

新入社員として列席した桃井日菜子は、優秀そうな周囲の雰囲気^{ももい ひなこ}に圧倒されていた。

日菜子がこの会社——家具・インテリアを扱う商社「彩美物産」^{さいびぶつさん}に就職できたのは、予想外の出来事だった。

とある田舎^{いなか}の農家に生まれ、短大を卒業するまで実家暮らし。子供の頃から、将来は地元の企業に就職して結婚するのだらうと、漠然と考えていた。狭い世界で一生を終えることに悲観もしないくらい、自然なこととして受け入れていたのだ。

そんな日菜子が都会にある彩美物産の採用試験を受けたのは、お世話になった教授の勧めだった。試験は受けたけれど、はっきり言って観光気分。どうせ自分なんて受かるはずないと高^{たか}をくくっていた。しかし、人生はどう転ぶかわからない。

大企業に内定をもらったとき、家族や周囲は大いに喜んだ。

当初、地元を離れることに乗り気ではなかった日菜子も、外野の盛り上がりには押されて次第にその気になっていった。

決め手となった出来事は他にもあったものの、思い切って飛び込んだ新天地。だが、生まれ育った場所とはまるで違う大都会に、今や日菜子は完全に萎縮（いしゆく）しきつていた。

今朝、一人暮らしのアパートで真新しいスーツに身を包んだときには、結構イケてるかもと一瞬、勘違いした。だが、いざ入社式に臨（のぞ）んでみると、周りにはみんな自分より素敵に見える。

——おばあちゃん、私にこんな大企業は、やっぱり場違いだったかも……

自分の選択は間違っていたのでは、と早くも後悔しているうちに、入社式が終わった。

本当にこの会社でやっていけるのかと自信喪失しかけた日菜子だが、入社式後に始まったオリエンテーションを受け、その考えは一変する。

やっていけるかどうかとかじゃない、なにがなんでもやっていく。そしていつか、“彼”の役に立てる社員になりたいと思った。

そう、日菜子は運命の人に出会ってしまったのだ。

「営業事業部の藤崎央人です。新入社員の皆さん、入社おめでとうございます」

さつきまでの緊張も忘れて、日菜子の目は壇上の人物に釘付けになる。

すらりとスーツを着こなす高身長に、端正な顔立ち。肌も綺麗（きれい）でキラキラしていて、モデルや俳

優と比べても遜色（そんしよく）ない。年齢は三十歳らしく、大人の余裕たつぷりで圧倒的な存在感を放っていた。

——もんげえええ！

さすがは大手商社。従業員の顔面偏差値も、高い！

都会には豊かな自然がない代わりに、こんなにも華のある人がいるのかと日菜子は驚嘆（きょうたん）した。

「今日は、未来ある後輩たちに私の体験談を話せと仰（おほ）せつかりました。まあ、堅苦しい内容ではないので、リラックスして聞いてください」

親しみやすい口調に、新入社員たちの肩の力が自然と抜ける。

オリエンテーションの講師には、各部署の最も優秀な人材が選ばれているらしい。その中でも、央人は群を抜いて若かった。

しかし、例に違（たが）わず央人の業績もまた華々しく、海外企業とのプロジェクトにいくつも携（たず）わっているようだ。それらのエピソードについて、ユーモアを混（ま）じえて軽妙にトークしていく。

苦難から転じて成功するまでのプロセスをわかりやすく説明してくれたので、新入社員たちは皆、彼の話に聞き入った。人を惹きつける話術からも、央人のセンスや有能（うなが）ぶりが窺（うかが）える。

プロジェクトを使用していたため室内は薄暗かったが、彼だけは光り輝いていた。少なくとも、日菜子にはそう見えたのである。

——なんて素敵な人なんだろう！

かつこいいだけでなく仕事もできる。田舎娘（いなかむすめ）のハートは、瞬時に射貫（いぬ）かれた。

「では、質問のある方は挙手をどうぞ」

話が終わる頃には、央人はすっかり新入社員たちの憧れの的になっていた。

皆、我先にと手を挙げ、色々な質問を投げかける。彼は、ひとつひとつに誠実にかつ丁寧に回答していく。

日菜子も夢中で右手を挙げていた。

いくつかの質疑応答が終わったところで、会場を見渡した央人とようやく目が合う。

「時間的にも、次が最後の質問かな？——じゃあ、その彼女。どうぞ」

「は……はいっ！」

ラストにして巡ってきたチャンス。日菜子は渡されたマイクを握り締めながら大きく息を吸って発言した。

「毎日の業務や出張でお忙しいと思いますが、藤崎さんにとっての癒しはなんですか？」

「——は？」

室内が、水を打ったように静まりかえる。

「あ、あの、私は一般職で採用されたので、補佐役として総合職の方が快適に働けるよう努力したいなと思い、まして……」

慌てて補足したが、状況はまったく変わらない。

——私、さっそくやらかした……？

彩美物産には総合職と一般職の社員がおり、日菜子は後者として採用された。

総合職には超有名大学出身者が数多く在籍し、世界各地を飛び回り活躍している。

一方の一般職は、総合職の事務的な業務を補佐することがメイン。だから、央人たちが総合職の社員のために努力したいと、日菜子なりに考えての質問だったのだが……

「癒し、ねえ……」

どんな質問にも即座に返答していた央人が、考え込んでしまった。これまでに一番陳腐な質問は、かえって彼を悩ませたらしい。

「——そりゃあもちろん、プライベートの充実だよな？」

沈黙する央人を見かねたのか、隣にいた司会役の男性社員が代わりにマイクを握った。

「どんなに仕事にやり甲斐があっても、人間だから疲弊はする。そんなときには息抜きが必要だ。

趣味に没頭するとか、愛しい恋人と語らう……とかね？　ちなみに、こちらの藤崎くんは、先日婚約を発表したばかりです。はい、拍手——」

突然飛び出したおめでたい報告に、その場の空気がどよめき——女子たちは固まった。

パラパラと聞こえる拍手に交ざって、なにかが砕け散る音もあちこちから響いている気がする。

「圭吾……」

「でもご安心ください。我が社には藤崎くんの他にも素敵な社員がたくさんいます。社内恋愛にも寛容ですから、皆さんどうぞよろしく願います」

「圭吾、ふざけすぎ」

そう言つて司会役をたしなめた央人の視線が、ふたたび日菜子へと向けられた。

突然婚約を暴露された央人は、バツの悪そうな——でも、幸せそうな顔をしている。目と目が合ったのは、ほんの数秒。だが、その短い時間で日菜子はすべてを悟つた。

——こんな素敵な人に、相手がいないわけがなかった……

自分と彼との間で、なにかが始まるわけもない。

「御婚約、おめでとうございます」

おずおずと祝いの言葉を伝えると、彼は照れくさそうにはにかむ。

「ありがとう。ちよつとびつくりしたけど、なかなか勇気のある質問だったと思うよ。その積極性を、今後も業務に活かしてください」

向けられた優しい笑みにさえ、日菜子の心はツキンと痛んだ。

それは、失恋と呼ぶには呆気ない、些細な出来事。

芽生えかけた恋心は、即座に摘み取られた。

それなのに——

彼は日菜子の心の中に住みつき、いつまでも消えることはなかった。

その後まさか、百回玉砕しても諦めきれないほど憧れて、一生に一度の恋をすることになるなんて。この時の日菜子はまだ知る由もない——

一 アタックは、慎重かつ大胆に

時は流れ、あれから二年——

「ただいま戻りました」

ランチタイムを迎えたオフィスは人もまばらで、外出先から帰社した日菜子に返事をする者もない。ついでに、お昼に誘ってくれる同僚もない。

わずかにショックを受けつつ、日菜子は自分のデスクに着く。

入社三年目にもかかわらずこんな状態なのは、人間関係が上手くいっていない——からではない。日菜子がこの部署に配属されて、まだ日が浅いからだ。

一般職は、めったなことがなければ異動も転勤もない。しかし希望を出せば絶対に通らないわけでもない。日菜子はこの二年間、元いた人事部で仕事に励みながら異動の希望を出し続けていた。

異動希望先は社内随一の忙しさなので、とにかく自分が貢献できる人材であること、そしてガッツがあることを猛アピールし続けたのである。

その努力が認められてようやく念願叶つたのは、つい先日のこと。

彩美物産営業事業部——ここが、日菜子の現在の職場である。

白を基調とした室内は、大きな窓が配置されていて開放的。明るい光が降り注ぐフロアの奥の一角に、管理職たちに与えられた個別の執務室があった。

半透明のアクリル板で仕切られた部屋の内部は見えにくくなっているが、シルエットで在席の有無は確認できる。

「どうやら今、『彼』は一人で中にいるらしい。」

——チャンス、到来。

日菜子は周囲を警戒しながらデスクの下の荷物入れをたぐり寄せ、深緑色のランチバッグを取り出す。

ついでに小さな手鏡で、身だしなみをチェックするのも忘れない。

前髪をささつと整え、薄くなったグロスは口を引き結んで伸ばす。束ねた髪に指を通し、スカートの皺もチェックした。

欲を言えば、ヒールの高い靴に履き替えて百五十二センチしかない身長をカバーしたい。しかしそこは、動きやすさ重視のローファーしか持っていないので我慢だ。

——ぐだぐだ悩んでも仕方ない。いざ、出陣じゃ！

コンプレックスである低い身長も、隠密行動には都合がいい。オフィスの隅をそっと歩いて、目的の場所までこっそりと移動する。執務室の扉を短く三回ノックすると、中から返事があった。

「失礼します」

一声かけてから、扉を開ける。

デスクでパソコンとにらめっこしていた人物は、仕事の手を止めて顔を上げた。

「桃井さん。おかえり」

無表情で仕事をしていた彼が、たちまち人当たりのいい笑みを浮かべる。たったそれだけのことで、日菜子のテンションは急上昇した。

「藤崎課長、ただいま戻りました」

二年前のオリエンテーションで日菜子を虜にした人物は、今では彩美物産の最年少課長となっている。

「急におつかいを頼んで悪かったね」

「いいえ！ 課長の……いや、課長たちのお手伝いをするのが、私の仕事ですから」

「ありがとう。本当に助かった。桃井さんのお陰で間に合ったよ」

忙しい彼に代わって急ぎの書類を届けただけで、大したことはしていない。それなのに彼に笑顔を向けてもらえて、得をした気分である。

彼の役に立ちたい——それが営業事業部への日菜子の異動希望理由だった。

それに、今日このタイミングでおつかいを頼まれたのは、日菜子にとって絶好の機会をもらったも同然。「これ」を渡すチャンスを、ずっと窺っていたのだ。

手にしているランチバッグを、ぎゅっと握り締める。中身はもちろん、手作りのお弁当。彼のこ

を思いながら、彼のために作った力作だ。

「わざわざ報告ありがとう。遅くなったけど、ランチに行っておいで」

その言葉を聞き、話を切り出すタイミングをはかっていた日菜子の目が光る。

意を決して、抱えていたものを差し出す。

「あの……お弁当を作ってきたので、もしよければ受け取っていただけませんか？」

発した声は思いのほか震えていたが、なんとか言えた。

央人は日菜子の手元を見つめて、わずかに目を細める。

「お弁当？　でも、それを俺がもらったら、君のランチがなくなるんじゃない？」

「いいえ！　今日は自分の分も、ちゃんと用意してきました！」

このやり取りは想定済み。なぜなら先日、そう言ってお断りされたからだ。

しかし今日はいけるはず。そう踏んでいた日菜子であったが、現実はそう甘くない。

「……なるほどね」

短い沈黙のあとで、央人は少しだけ口角を上げる。

ニヤリと意味深に笑った彼に、日菜子はまたしても敗北を悟った。

「それは是非ご相伴にあずかりたいところだけど、あいにく今日は先約があるんだ。残念だけど、またの機会にね」

にこりと笑って、ぴしやりとシャットアウト。

日菜子はガックリ肩を落とした。

「そう、ですか……仕方がないですよ」

「いつもごめんね？　桃井さん」

口ではそう言ったけれど、クスクスと笑う央人の表情は涼しいもので、ちよつと意地悪だ。

日菜子がどんなに頭を捻ってアタックしたとしても、彼は簡単にかわすだろう。しかも、とびきりスマートに。

恨みがましく央人を睨むも、彼は日菜子の好きなあの笑顔を向けたままにいる。

——ああ、課長。その笑顔はズルイです……

断っておきながらもそんな笑顔を見せるから、まだ頑張れると思ってしまう。

初めて出会った日に、呆気なく摘み取られたはずの恋心は年々大きくなっている。

あのまま彼が結婚していたら、きちんと諦められたと思う。けれど今、日菜子に向けてひらひらと振られる彼の手に、結婚指輪はない。

入社後のオリエンテーションからしばらくして、彼は婚約を解消した。

日菜子はそれ以来、こんなふうに毎回断られているにもかかわらず、彼に想いを寄せ続けている。小さなものも含めたら、何度アプローチしたか知れない。惨敗記録は、すでに百を超しているのではないだろうか。

今ではもう、簡単には引き返せないほど彼にハマっている——

「……しかし、ひなちゃんも懲りないね」

ランチタイムのピークを過ぎて、空席の目立ち始めた社員食堂。

本日の戦果の報告のため息を吐くのは、日菜子の同期・青柳佐保だ。

ウェーブのかかった長い髪に大きな瞳の佐保は、会社の顔である受付嬢として勤務している。

いつまでもあか抜けない日菜子とは、一見すると対照的な容姿。新人研修で同じ班にならなければ、きつと接点はなかっただろう。

けれどサバサバした性格の佐保とは、話してみたら意外と気が合った。お互いの悩みなどを話しているうちにすっかり打ち解けて、今では親友と呼べる間柄になっている。

「いい加減に諦めたら？ 時間と労力と食材の無駄じゃない」

——歯に衣着せない佐保の意見が、時として憎い！

「一人分を作るのも二人分を作るのも、そんなに変わらないし。それに、料理は私の唯一の武器なんだから、アピールするのにこれを使わない手がある!？」

「でも、全然有効に作用してないじゃん」

「うぐぐ」

央人にお弁当を差し入れするのは、今に始まったことではない。営業に異動してから毎日のようにお弁当を渡そうと試みている。今日のように渡せる機会がある時はまだいいほうで、そもそも央

人がお昼に外出している日も多い。加えて、声をかけられた時でも、受け取ってもらえたことは一度もない。

「連敗記録は今日も更新。まあ、私は昼食代が浮いて助かるけどね」

無駄と言いながら、佐保はランチバッグを嬉しそうに受け取った。

残ったお弁当を引き受けるのは、佐保の日課となっている。今日も日菜子が来るまで昼食をとらず待っていたのは、このためだろう。

二人でそれぞれお弁当を広げ、さっそく食べ始める。

「今日は先約が入っていたけども。明日は、食べてくれるかもしれないじゃない」

央人に代わってお弁当を食べてくれる佐保には感謝しているが、あげられない日が来るかもしれないのだ。たとえば明日とか！

「そうやって断られるの何回目？ ひなちゃんだけじゃなくて、他にも玉碎している人間は大勢いるって噂だよ」

「うぐぐ」

央人が誰からのプレゼントであっても受け取らない、というのは社内では有名な話だ。

かつてバレンタインのときに苦労したことがあるらしく、今では差し入れの類をすべて断っていると聞く。

それでも、容姿や能力に取り柄がないと思っている日菜子には、料理の他に自己アピールの方法

が思いつかない。

それに、断るにしてもあの態度である。

一応、『またの機会にね』と、含みのあることを言う。だから、一度や二度断られたくらいでは余計に諦めがつきにくい。いや、そんな数ではきかないほど、すでに断られているが。

「課長がフリーになって、もう二年か……誰かと付き合っているような話も聞かないから、みんな収めどころがないんだよね」

日菜子に同情するように、佐保が言う。

央人が婚約解消した当時、瞬く間に噂は社内を駆け巡った。しかもその後、とんとん拍子に彼が出世したので、女子社員たちの多くが色めき立ったものだ。

央人争奪戦はヒートアップしたが、彼が社内の誰かと付き合ったという話は聞いたことがない。社外に彼女がいるという話も聞かない。

そして今では、相当身持ちが固く、難攻不落の孤高の存在として女子社員たちの注目を集めている。そのうえ、彼と恋人になったら、一生大切にしてくれそうと評判がますます高まっていた。

「ライバルも多いし、脈もないし。実らない片想いなんて、もうやめたら？」

「それは無理」

佐保の提案を、日菜子は即座に却下した。

「やっと同じ部署に異動できたんだもん。これからだよ」

この二年間だって、なにもしてこなかったわけではない。人事部から営業事業部に異動するための努力を続けながら、他にも思いつく限りのことを試した。

日菜子はこれまでの努力の日々を、佐保に熱弁する。

まずは、定番の待ち伏せ。

仕事終わりの央人と偶然を装って出くわし、会話を弾ませて食事に誘うという完璧なシナリオを用意した。

しかし、めったに残業のない一般職と違い、央人の退社時間はいつも遅い。人事部の特権で、タイムカードの退勤時間から傾向と対策も割り出してみたが、同じことを考えるライバルはすでにいて、結局は近づくことさえできなかった。

そもそも帰宅途中の彼に会えたとして、会話を弾ませるなんてスキルが日菜子にあったのかも怪しいが、それは考えなくておく。

ならばと、今度は出社を狙った。

幸運にも日菜子と央人の家は同じ沿線で、電車で鉢合わせてもおかしくはない。こちらタイムカードから傾向と対策を割り出すまではよかったのだが、詰めが甘かった。

まず、央人がどの車両に乗り込むのかがわからない。それでなくとも、都会の朝の通勤ラッシュに慣れていない日菜子では同じ車両内でも移動することなど不可能に等しく、ごく稀に央人の姿を見かけることはあったけれど、人の壁に行く手を阻まれ近づけなかった。

そんなこんなで、二年間にともに口をきいた回数はゼロ……熱意だけは、買ってほしい。

「いやいや。それって、ただのストーカーだから」

「今は声もかけられるようになったし、待ち伏せなんてしないもん」

今はオフィスで毎日顔を合わせられる。異動初日に名前を呼ばれたときは、あまりの嬉しさで涙が出たほどだ。

「ねえ、ひなちゃんの最終目標ってなに？ 藤崎課長の恋人になること？ それとも、結婚？」

「まさか。私はただ、あの人に自分の存在を認識してもらって、役に立ちたいだけ」

思っていることをそのまま言ったところ、佐保は目を丸くする。

身の程知らずな恋を続けている日菜子だって、恋人にしてもらえるだなんて、これっぽっちも思っていない。田舎から出てきたしがないOLの日菜子と、出世街道をひた走っている央人とは釣り合いがとれないことは、自分が一番理解している。

それでも、好きになってしまったのだから仕方がない。平凡な人間だけど、せめて視界に収めてもらいたいと足掻くくらいは許されると信じている。

「はあ？ それって、アイドルのファンみたいなもの？ コンサートで毎回頑張って最前列の席を確保したり、出待ちしたりとか」

「うーん、近い、かも……」

最肩のアイドルに声をかけてもらうのは、最大の喜びだろう。中には本気で結婚したいと考える

ファンもいるが、大抵は叶わぬ夢であることを知っている。そういう意味では、日菜子も同じなのかもしれない。

好きな人に存在を認識してもらえないのは悲しい。だけど決して高望みもしない。

彼のそばで、彼のためににかがしたい。

その願いを今、日菜子は着実に叶えている。

「なんて無欲な！ それが、二十歳を超えた大人の女性が思うこと!？」

「失礼ね。大人だから、身の程を知っているだけです」

胸を張る日菜子に、佐保は信じられないといった具合に頭を抱える。

「わかんないなあ……でも、まあ……とりあえず、応援だけはしてる」

「ありがとう、佐保ちゃん！」

ちなみに、佐保にはつい先日、彼氏ができた。他社に勤めるサラリーマンで、彩美物産を訪問した際に接客した佐保に、一目惚れしたと言って声をかけてきたらしい。

可愛くて綺麗な女の子は、待っているだけで出合いの機会が訪れる。

そうでない日菜子は、自分から動いて努力あるのみだ。

「もっと周りに目を向ければ、ひなちゃんにも幸せは転がっているのにね」

意味深に呟いた佐保が、後方を顎で示す。その方向から、一人の男性がこちらに向かって歩いてくるのが目に留まった。

「桃井！ お疲れ様。よかった、無事に戻ったんだ」

「常磐さん。お疲れ様です」

足早に近寄ってきたのは、営業事業部に所属する常磐慎之介^{しんのすけ}。年齢は日菜子たちよりひとつ年上で、一年の地方研修を終えて、最近本社に転属されたばかりだ。

切り揃えられた短髪が爽やかな印象の彼は、同時期に異動してきた日菜子のことをよく気に掛けてくれている。

「俺の代わりに課長の案件で外に行かせてごめんな？」

「そんなこと気にしなくてもいいですよ」

届け物くらい自分にだってできると、日菜子は苦笑いする。

「いくらひなちゃんでも、迷子になったりしませんよ。常磐さんは過保護ですなぁ」

「そう言うけどな、青柳。行ったことのない会社なんだぞ？ 知らない場所に行くのは大変だろ？」

「大丈夫ですよ。スマホにナビが付いてますから」

「そっか。桃井は偉いな」

偉いのはスマホであって日菜子ではない。

自分の手柄だと受け取られるのは違うと思いつつも、とりあえず笑顔を見せる。

「一方通行だわ……」

そう呟きながら、なぜか佐保が生暖かい目をしていた。

「ところでそれ、青柳の弁当か？」

日菜子たちのテーブルの横に立った常磐は、佐保の前に置かれた弁当を指さす。

弁当と認識できないほど、ひどい出来ではないはずなので、彼がそう聞いたのはサイズのせいだろう。

「フフッ、これは、日菜子が私のために作った、愛情たっぷりのお弁当なんです」

喜々として自慢する佐保に、日菜子は思わずジト目になる。

——愛情は込めているけど、込めた相手は違う！ 食べてくれるのはありがたいけど……

「へー、美味そうだな。それにしても、でかくねぇ？」

佐保の弁当箱は、日菜子のものの倍の大きさ。男性が食べることを想定して作ったので、量を増やしている。

それでも佐保は、毎回それをべろりと平らげてしまうから、見かけに寄らず大食いだ。

「ボリュームはあるけど、野菜たっぷりでヘルシーだから問題ありません」

今日のメニューは、肉巻きおにぎりに卵焼きとウインナー、プロッコリーとミニトマトで彩りを添えて、ほうれん草のお浸しとニンジンとたらこの炒め物も入れてみた。

佐保はヘルシーと言ったが、男子ウケするおかずをネットで調べて作ったので肉料理がメインだ。ヘルシーとは言い難い。

それはさておき、恋愛経験の乏しい日菜子はメニューに自信がなかったのだが、常磐の反応を見

る限り間違っではないらしい。

「いいな……俺、一人暮らしだから手料理って食べる機会ないんだよ。青柳には多すぎるだろう？
ちよっと分けてくれよ」

「ダメです」

お弁当に向かつて伸びてきた常盤の手を、佐保はピシッと払いのける。

「これは私のなんだから、誰にもあげないっ！」

——だから、佐保のじゃないんだけどなあ。

心の中でツツコミを入れつつ、どこかでホツとする。

央人に受け取ってはもらえなくとも、他の男の人が口にするのは抵抗があった。

「だったら今度、俺の分も作ってきてくれないか!？」

しばらく羨ましそうに眺めていた常盤が、急に日菜子に向かつて身を乗り出した。

「ええっ!？」

「もちろん、ちゃんとお礼はする。フレンチでもイタリアンでも、好きなものをご馳走するから」
それほど手料理に飢えているのかと、突然の申し出に日菜子は困惑した。

一人暮らしで料理もできないという彼を、気の毒に思わないわけではない。しかし、気乗りはしない。

日菜子が央人のためにお弁当を作るのは、彼が好きだからだ。女子力のアピールもあるが、忙し

い央人の健康を憂慮ゆうりょすること。冷たいかもしれないけれど、他の男性にはそこまで気を回せない。
返事に困って視線を彷徨さまよわせると、肉巻きおにぎりにかぶりついていて佐保と目が合う。

「……自分で頑張りなさい」

小さな声で突き放されたが、彼女なりに「央人のお弁当」は守ってくれている。

ここは自分が頑張るしかない。

日菜子が口を開きかけたとき、ふと、背後から声をかけられる。

「——楽しそうだね」

この声は——

「ふ、藤崎課長……!」

振り返ると、そこにはやっぱり央人が立っていた。隣には、彼の同期で係長の小金井圭吾こがねいの姿もある。

「盛り上がってるみたいだけど、なにを話してたの？」

央人の言葉を聞いた常盤が、上司二人に簡潔に説明をする。

「お疲れ様です。青柳のこの弁当、桃井が作ったらいいんですよ。あまりにも美味うまそうなので、俺にも作ってほしいって頼んだところで」

一瞬の間まを置いて、央人の視線が日菜子に向けられ、それから佐保の前のお弁当箱に注そそがれた。
お弁当箱のすぐそばには、深緑色のランチバッグも置かれている。おそらく央人は、それがつい

先ほど自分へと差し出されたものと気づいただろう。

横流しにしたのが見つかってしまい、なんだか気まずい。

「本当に、美味しそうなお弁当だ」

日菜子との秘密のやり取りなどおくびにも出さず、央人は涼しげな顔で常磐と会話を続ける。

「そうなんですよ。でも青柳は、一口もくれなくて」

「だって本当に美味しいんだもの。他人にあげるのはもったいないです」

——佐保ちゃん、ナイスアシスト！

日菜子はオロオロしながらも、常磐と佐保からの高評価が後押しとなって、次の機会には央人がお弁当を受け取ってくれないかなと仄かな期待を寄せる。

するとその直後、央人は予想外の行動に出た。

「そうか。じゃあ、味見してもいい？」

そう言つて、央人がひょいと手を伸ばしたのは、日菜子の弁当箱だった。

「ええっ!？」

彼が摘まんだのは、ハート型の卵焼き。普通に切ったひと切れを、さらに真ん中で斜めに切つて並べて盛りつけたものだ。

そのハートの片割れを指で持ち上げた央人は、そのままバクリと口に入れる。

「……うん。甘くて、美味しい。桃井さんは料理上手だね」

指先をべろつと舐める仕草がやけにセクシーで、日菜子の胸は激しくときめく。

央人が自分の手料理を初めて食べてくれたという事実、一気に舞い上がった。

——課長が、私のハートを食べたあああ！

「ありがとう。また、俺にも作ってきてくれると嬉しいな」

「はい！ 喜んで！」

そばに立っている常盤が「え、『また』ってどういうこと？」と不思議がついていたが、そんなことに構つてはいられない。今日までの連敗記録も忘れて、天にも昇る心地で央人の背中を見送った。

「あれは……罪作りの男だね」

惚ける日菜子の横で、佐保は感心したように唸る。

「罪作りでも手作りは好きなんだね……佐保ちゃん、私、明日からも頑張るよ！」

日菜子はふたたび、やる気を滾らせた。

その様子を眺めている常盤は微妙な顔で、苦笑する佐保に肩を叩かれている。

「敵は手強い、ね」

佐保のそれは日菜子と常盤の二人に向けられた言葉だったのだけれど、舞い上がる彼女の耳には届いていなかった。

確かに入社式の日のオリエンテーションで日菜子は央人に一目惚れをした。

だが、本当に彼に恋をしたのは、もっとあと。

日菜子の心は、入社三か月後の「あの雨の日」から、ずっと央人に囚われている。おそらく社内の誰も知らない、彼の一面を知ったあの日から――

「央人、さっきの行動。おまえにしては珍しいな」

食堂を出た藤崎央人は、同期の小金井圭吾とともに喫煙室にやってきた。

煙草に火を点けながら自分に向かって片眉を上げる圭吾に、央人は顔をしかめる。

「なんのことだ？」

圭吾が言いたいことはわかっていたが、面倒なのでしばらくくれたが……

「普段のおまえなら、絶対に他人の手料理なんか口にしないだろう？」

やはり、この男は鋭い。央人が気づいてほしくないことも敏感に察知してしまう。

圭吾が言っているのは、先ほどの社員食堂での央人の行動だ。桃井日菜子の弁当箱から卵焼きを摘まんで食べたことを指している。

「他人の手料理が食べられないわけじゃない。ちよつと……気が向いた、だけだ」

適当にはぐらかし、ここへ来る途中で買った缶コーヒを口に運ぶ。

なんでもないふうを装いながら答えたが、あの行動に一番驚いているのは央人だった。

なぜ、あんな人がたくさんいる場所で、わざわざ食べかけの弁当に手を伸ばしたのか……

厄介事を避けるため、日頃から女子社員からのプレゼントの類は断っている。一度受け取れば収拾がつかなくなることはわかりきっていたし、相手の気持ちに配慮するつもりもない。

――それなのに、俺はなぜ？

桃井日菜子が友人に渡した弁当が、自分に差し出されたものだというのは一目でわかった。

だが、受け取らなかったものを、どう扱おうが彼女の自由だ。

「気が向いた、ねえ。俺には後輩に対して嫉妬心丸出したように見えたけど？」

「そんな馬鹿な」

くだらないと、央人は一笑に付す。

「なあ、いつそのこと桃井と付き合ってみたらどうだ？ お試しから始めてみるとか」

それでもまだ圭吾は、含み笑いをしながら煙をくゆらせている。

央人は呆れてため息を吐いた。

「よせよ。面倒臭い」

「そうか？ おまえも意外と気に掛けているように見えたぞ」

「異動してきたばかりの彼女を気に掛けるのは当然だろう？ せっかく事務の新任が見つかったのに」

央人が日菜子を気に掛ける理由は、それしかない。

営業事業部は多忙を極める部署。海外への買い付けなどで出張も多く、勤務時間も不規則になりがちだ。一般職は残業など、ある程度セーブされているが、まったく影響を受けないわけではない。それに営業マンは体育会系の気質の者も多く、口調がきつかったりもする。

色々な面でハードな職場についていけず、辞めてしまう一般職が多かった。そのため、営業事業部は慢性的な事務員不足に陥っている。

管理職に就いている央人は、部内の人事も担っている。経験不足でもいいからタフな人間を回してくれと人事部長に依頼したところ、推薦されたのが桃井日菜子だった。

入社三年目の彼女は、今のところ及第点。経験不足なのは否めないが、キャリアを考えれば当然のことだ。

——しかし、並々ならぬ熱意だけは感じられる。

失敗することもあるが、積極的に仕事を覚えて貢献しようとしている。指示を出す人間の目を感じと覗き込み、真剣に業務メモを取る姿をよく見かけた。明るくハキハキした性格で、部内での評判も上々だ。

まだ若いこともあってか、多少元氣すぎる感はあるものの、部署の雰囲気には合っている。

もちろん、彼女のモチベーションの一端が自分にあることは承知の上だ。

毎日手作りの弁当を渡されれば、どんなに鈍い男でも気づく。

それほどの積極性を持ちつつも、肝心なところで毎回なかなか言い出せずにこちらを窺っている

様子にはクスリとする。央人から声をかけると嬉しそうに頬を赤らめるという初心な反応も、ちぐはぐな感じがして見ていて飽きない。

央人の周りには今までいなかったタイプである。

学生時代も社会人になってからも、央人の周囲には自分に自信がある女性が多かった。

彼女たちは、他人に臆することも遠慮することもない。目的のためには他者を蹴落とすことさえ厭わない。

特に就職してからは、仕事柄エリート志向の強い女性と出会うことが多かった。商社の最前線である営業事業部にいるのだから、当然の成り行きと言える。

——男性と対等に渡り合っている女性に、魅力を感じていた時期もあった。

その頃の央人はとにかく仕事のことしか頭になく、自分のキャリアにとって有益か否かで女性との付き合いを考えていた。

お互いに高め合える相手でなければ、一緒にいる意味はないとさえ思っていたのである。

どこまでも自分本位なことを考えていた結果が、二年前の婚約解消だ。

あの一件では、相当痛い目を見た。しかし同時に目が覚めた。

家庭を持っていたほうが世間体がいいだとか、そんなことを考えていた央人にとって、結婚は出世のための手段であった。

上昇志向が強く、バリバリと仕事をこなすキャリアウーマンだった元婚約者とは、お互いの利害

が一致していた。

愛や恋といった、甘い感情だけで決めた結婚ではない。とてもドライで虚しい関係。最初からお互いに好きではなかったのだと、今ならはっきりわかる。

——昔、誰かに『自分にとつての癒しはなにか』という質問をされたことがあった。当時の央人は婚約中だったが、最愛の人であるはずの彼女といても、癒されると感じたことはなかった。

婚約解消の理由は、相手の不貞——彼女は取引先の重役と、不倫していた。だが元婚約者の裏切りを知ったときも、悲しさや怒りはなかった。

彼女は自分よりもさらに計算的で、目的を達成するためには手段を選ばなかったのだ。同い年の央人というよりも、愛人稼業のほう割がいいと踏んだらしい。いつかは正妻の座も奪ってやるとも言っていた。

潔いまでの彼女の態度を見て、央人は不思議とすっきりした気分だった。そして、瞬間に消え去った彼女への想い——

結婚したところで、きつと先は見えていただろう。

「桃井って、料理上手なんだろう？ おまけに尽くすタイプっぽいし、嫁にするにはうってつけじゃないか」

思考を遮るように、やけに明るい圭吾の声が耳に届く。

実際に圭吾の顔つきは明るく、一押しの商品をプレゼンするかのよう生き生きとしている。

「嫁って……飛躍しすぎだ。それに、彼女は俺たちと十歳も年が離れている」

「いいじゃないか、若い嫁。毎日が楽しくなるぞ？」

ゲスな笑みを隠さない圭吾に、央人は白けた視線を向けた。

学生時代からの友人であるこの男は、央人の歴代の彼女を知っている。だからこそ、毛色の違う桃井を薦めたいのだろう。

だが——残念ながら、女性としては対象外。

「ああいうタイプは、女性というより妹に近い」

「妹、ねえ……おまえが妹と親しげにしているとこなんて、見たことないけどな」
ちなみに央人の妹は、同じ藤崎家のDNAを持つだけあってクールで自立心が強い。日菜子とはまったく異なるタイプであるため、圭吾は違和感を覚えたようだ。

「でも、それくらい親しみやすいほうが、おまえには合ってるんじゃない？ おまえに必要なのは、

競争相手じゃなくて、俺みたいなパートナーだよ」

圭吾は自分から前に出るタイプではなく、仕事上でも友人関係でも周囲の調整役になっていた。

央人との関係においても、圭吾が一步引いてサポートしてくれるから助けられていることも多い。「いつも付き合っているような私の強い女とはすぐに破綻するけど、俺との関係は続いているのがいい例だ」

「……おまえとは、ただの腐れ縁だろう？」

「うわ、冷たっ！」

社内での央人の評価は「誰にでも優しくて人当たりのいい課長」。しかし実際は、すごぶる外面（そつうめん）がいいだけで、冷淡で狡（さう）い男だ。

「おまえと周囲とを調整しているのは、この俺だぞ？」

「そうか？ 無理矢理飲み会に連れ出された記憶しかないけどな」

憎（にく）まれ口を叩いたが、圭吾には感謝もしている。

なんでも自分でできてしまう央人は、めったに他人を必要としない。ともすれば孤立しやすい自分に声をかけ、強引に集団の中に引き入れてくれるのは、いつも圭吾だ。

「おまえには、愛想よくしている外面（そつうめん）だけじゃなくて、裏の顔も理解してくれるような相手が必要なんだよ」

圭吾は央人に遠慮せず軽口を叩く。央人もあえて圭吾の前では自分を取り繕（つくろ）ったりしない。

「なあ央人、ずっと本心を隠したままじゃ疲れるぞ。自分の悪い面や弱いところをさらけ出せる相手を見つけろ」

「それが、桃井日菜子？ それこそ、ないな」

彼女こそ、見せかけの自分に惑わされているいい例だと、圭吾の主張を鼻で笑う。

「どうか。ああいう天真爛漫（てんしんらんまん）な人間は、他人のこともありのままに受け入れる懐（なつ）の深さを持っているかもしよ。侮（あなづ）つていると痛い目に遭（あ）うぞ？」

「女で痛い目に遭（あ）うのは、もう懲（こ）り懲（こ）りだ」

「おまえ、いい加減に吹っ切れよ……」

頑（かた）な央人に、今度は圭吾のほうが呆（あき）れてしまった。

——央人が恋愛から距離を置きたがるのを、圭吾は婚約破棄のトラウマだと思っているようだが、実は他にも理由はある。それは、親友である圭吾にも話していない。

ある女性との、一夜限りの思い出。その一人を、央人はずっと探し続けている。

元婚約者と別れた日、央人は「彼女」と出会った。

その彼女に——おそらく自分は、恋をした。

断言できないのは、これまで誰かに強く惹かれた経験がないためである。

それに、彼女がどこの誰なのかも、まったく覚えていないのだ。

元婚約者と別れたその足で飲みに行き、自棄（やけ）になつて浴びるほど酒を飲んだ。だから、彼女の顔も名前も、出会いの経緯（けいゐ）すらも曖昧（あいまい）で、気づいたときには彼女はすでに自分の隣にいた。

見ず知らずの相手でも、不思議と嫌な気持ちではしなかった。央人の話に耳を傾け、必死に元気づけようとする姿が健気（けなげ）で。最初からそこにいるのが当たり前のように、二人の波長（なみだ）がぴつたりと合ったような気がした。

彼女と過ごしたわずかな時間は、央人に癒（い）しをもたらした。

それは決して、元婚約者には抱くことのなかった感情。気がつけば、心の底から「彼女」を欲していた。

——この女性と、もっと一緒にいたい。

その一心で、ベッドをともにした。

彼女を抱いた感覚だけは、今も鮮明だ。

央人の背中へと回された遠慮がちな手の感触を、はつきりと覚えている。

小柄でも、胸はそれなりにあった。感じやすいのか、刺激を与えるたびに身体が敏感に跳ねて。

白い喉元を反らしながら、熱い息と甲高い声を漏らす姿を見て、柄にもなく興奮した。

朦朧とする頭でも、そのとき自分にできる精一杯の誠意を持って優しくしたつもりだったの

に――

目覚めたときには、自分は一人だった。

夢でも見たのかと思ったが、着ていた衣服は脱衣所のかごに収められ、ベッドのシーツには……

彼女の痕跡があったのだ。

それだけが、昨晚のことを現実だと教えてくれていた。

——せめて、もう一度だけでも会いたい。

顔も、名前すらもわからない。

なのに、彼女を想う気持ちは日に日に強くなっていく。

それは、初恋に似た感情なのかもしれない。それなりに恋愛経験は積んできたが、これほど心惹かれる相手は、後にも先にも彼女しかいなかった。

手がかりはないかと記憶を掘り起こしてみても、肝心なことはなにも覚えていない自分が悔しい。

だから央人は、なかば意地になって、現在進行形で彼女を待っている。

そもそも、自分が彼女の名前を聞いたかどうか不明だ。

だが彼女は、央人のことを『藤崎さん』と呼んでいた。

それだけは覚えているので、お互いに名乗り合ったか、もしくは元々知り合いだった誰かだと推測できる。

とはいえ、最初から知り合いだったのなら、後日向こうから話を切り出す気もするので、初対面の可能性も高いが。

そういえば、彼女の身長は桃井日菜子と同じくらいだった……

こんなふうに、なにかにつけて「彼女」と誰かを結びつけてしまうのは、もはや央人の癖になっている。

しかし、桃井日菜子が「彼女」なわけがない。

好意を持っている相手と一夜をともにして名乗り出ないなんてことは、あり得ないだろう。

もっとも、桃井日菜子はそんな女の武器を上手に使えるようにも見えないけれど。そんな狡猾なタイプでないことは、これまでの央人に対する態度から明らかだった。

肉食女子ばかりを相手にしていたから、稚拙なアプローチを微笑ましいと感じさえする。まるでお子様な感じで、身構えなくていい分、気が楽だ。

だから——弁当の卵焼きを食べるといふ、特異な行動に意味はない。本当に、ただの気まぐれ。

「そろそろ戻るか」

一服を終えた圭吾が一足先に喫煙室を出ていく。

「……美味かったな」

央人はコーヒーの味に消された甘い卵焼きを思い出しながら呟き、頭に浮かんだ疑念を追いつめた。

二 夜道で拾ったラブストーリー

大人で、女性の扱いにも長けていて、恋のライバルだつて多い。

そんなかつこいい上司に憧れるのはよくある話だけれど、日菜子の場合は少し複雑な事情がある。振り向いてももらえないと思っているわけではない。それでも、ただ遠巻きに見ているだけでは終わらせられない理由があった。

日菜子が央人に本当の意味で恋したのは——彼が婚約を解消した当日。おそらく、会社の人たちが事実を知るより少しだけ早いときだった。

その日は、朝からの雨が夜遅くになっても降り続いていた。

それでも日菜子の足取りは軽かった。

入社から三か月が経ち、少し心に余裕ができた頃。翌日は休みということもあって、同期たちと飲み会をした帰りだった。

終電の都合から一人で先に店を出て、駅までの道を鼻歌交じりで歩いていた日菜子。しかし、ひとつ角を曲がったところで冷静さを取り戻す。

駅の裏口へと続くその道は、繁華街と比べて物寂しい。ただでさえ少し不安を感じるのに、今日はさらに不穏な雰囲気がある。

駅へと向かう人たちは、道の端のある場所を避けるように歩いている。

日菜子は、恐る恐るその場所に近づく。

すると、人々が避けている場所の中心には、雨に打たれながら座り込んでいる男性がいた。

——嫌だな、酔っ払い？

花壇に腰掛けてうなだれている彼を、頭上の街灯がスポットライトのように照らす。

——どう見ても、真っ白に燃え尽きてる……！

その姿はまるで、ボクシングの試合を終えてリングのコーナーに座り込んでいるようだった。

もしも実家近くの町であれば、すぐに手を差し出していただろう。なにしろ、田舎では向こう三軒両隣が親戚という環境で、無視などすれば『反抗期だ！』『不良になった！』と、たちまち近所に広まってしまう。

だが、ここは都会。都会にはどんな人間がいるかわからないから気をつけると、祖母からもよく言いつけられた。きっと関わらないほうがいい。

——だけど——

近づくにつれはつきりとするシルエットに、つい興味を惹かれてしまう。

彼は、どれだけの時間、ここに座っているのだろう。

グレーのスーツは夜道でもわかるほど色が変わり、腕や足に張り付いている。くしゃりと髪の毛を握る指からは、雨粒が滴っていた。

顔はよく見えないけれど、哀愁が滲むその姿は、なぜだかとても色っぽく感じドキドキしてしまう。

——都会の男の人は、こんな姿も絵になるなあ……

ドラマや映画の光景みたいだと思いつながら、彼の横を通り過ぎる。

その間も、男性はびくりとも動かなかった。

このまま素通りしても、二度と会うことはない相手だ。自宅に帰って一晩ぐっすり眠ってしまえば、彼を思い出すこともないだろう。

——だけど——

どうしても、彼から目が離せなかった。

その姿は、ひどく儂げで——

放っておけば、闇に溶けて消えてしまいそうに思える。

「風邪、引きますよ？」

気がつけば、お気に入りのピンクの傘を彼に差し出していた。

日菜子の声に、男性がゆっくりと顔を上げる。その瞬間、日菜子は思わず声を上げた。

「ふ……藤崎、さん!？」

そこにいたのは——藤崎央人だった。

入社式後のオリエンテーションで見かけて以来、この数か月で彼の名前は何度も耳にした。営業成績トップという有能ぶりに加え、性格も温厚で人望も厚い。その優秀さから、近々最年少課長に昇進すると、もっぱらの噂になっている。

それに、結婚も間近。

順風満帆な人生を送っているはずの彼に、今の姿は似つかわしくない。

生気のない瞳を日菜子に向けた央人は、しばらく考え込んだあと、日菜子の服の袖口をそっと掴んだ。

「……だれ？」

呂律の回らない口調は、もしかなくとも酔っている。しかも、かなりの深酒だ。

ほんの少し距離を詰めただけでも、彼の周囲に濃いめのアルコールの匂いが漂っているのがわかった。

これは、ただごとではない。

「人事部の桃井です。藤崎さん、帰りましょう」

同じ会社の社員というだけで面識はないが、こんな状態の彼を放っておけるわけがない。

日菜子は元来、お節介焼きな性格なのだ。地元では同級生たちから「お母さん」というあだ名をつけられたくらいである。

捨てられた子犬みたいな瞳を向ける彼を、介抱せずにはいられない。

「帰る……？」

小首をかしげる央人に、日菜子の胸はさらにキュンと音を立てる。

日菜子の母性本能が、激しく揺さぶられた。

「こんなところにいたら身体を壊します。ご自宅まで送りますから、一緒に帰りましょう」視線を合わせるためにしゃがみ込むと、長い睫毛に縁取られた虚ろな目が伏せられる。

「身体なんか壊れたっていい」

「そんなこと言って！ 家族が……もうすぐ結婚する彼女さんだって心配しますよ」

きつと彼女は、彼の帰りを待っているだろう。心配しないはずがない。

しかしその問いかけに、央人は掠れた呟きを返した。

「別れた」

偶然に知った事実に驚く。

彼が今こんな状態になっているのは、それが理由なのだろうか。

——誰かと付き合った経験はないが、ひとつの恋が終わったときの喪失感には覚えがある。

日菜子にも、ずっと好きだった人がいた。

家が近所の、いわゆる幼なじみと呼ばれる相手。子供の頃から想いを寄せて、将来はきつと彼のお嫁さんになれると信じていた。

だけど、彼は違う相手と恋をした。さらに恋人といるときに出くわした日菜子を、彼は親戚だと紹介したのだ。

——ショックだった。

ずっと一緒にいて、彼のことを一番よくわかってるのは自分だと思っていたのに。理解者であることと恋人になることは違うのだと、このとき日菜子は初めて理解した。

いや、そもそも彼は、日菜子が自分の一番の理解者だとも思っていなかったかもしれない。

そんな独りよがりな自分の考えに気づいたときは、恥ずかしくて、居た堪れなくて……恋愛に対して、一気に自信がなくなった。以来、日菜子は「自分のことを好いてくれる人なんていない」と諦めている節がある。

実家から離れた場所での就職を決めたのには、この失恋も大きく影響していた。

「……大丈夫ですか？」

日菜子の問いに、央人は小さく首を縦に振った。そのあとなにかを呟いていたが、傘に当たる雨音によってかき消される。

彼の反応はただの強がりなのだった。

こんなときにおかしいが、日菜子は初めて彼に親近感のようなものを覚えた。

営業部のエースとして周囲の期待を一身に背負う彼と、平凡で取り柄のない自分。

会社で央人の評判を耳にするほど、自分なんかを恋としてはいけない相手だったと思い知らさ

れた。

彼と自分の人生が変わることは、きっと一度もない。そう考えていたけれど、今、一瞬だけ交差しているように思えた。

「大丈夫じゃ、ないですよね」

確信を持って央人の手を力任せに強く引つ張ると、その身体は驚くほど簡単にぐらりと揺れる。

「——あっ！」

倒れ込んできた大きな身体に、小柄な日菜子はすっぽりと包み込まれた。

生まれて初めての男性との抱擁に、日菜子の胸がドキドキと高鳴る。ずぶ濡れの央人の身体は冷たいが、なぜか心地がいい。

「ふ、藤崎さ……？」

「大丈夫じゃないって言ったら、そばにいてくれる？」

日菜子の肩にもたれながら、央人は少しだけ顎を上げて耳元でささやいた。

どこか甘えるようなその声は、日菜子の心にじわじわと広がっていく。

こんなふうに、誰かに求められたのは初めてだった。

自分の恋愛観は間違っていると気づかされ、自分に自信が持てなかった。

だけど今、この人は自分を求めてくれている……

「はい。そばにいます」

——今、この人の力になりたい。

偶然の出来事だけど、他の誰でもなく自分を求めているこの人を癒やしてあげたい。自分にも、できるかもしれない。

冷たい彼の身体を抱き締めながら、日菜子はそう強く願った。

ずぶ濡れになったふたりは、夜の街を歩いた。

なんとか央人の自宅を聞き出し、近くだったので徒歩で向かう。日菜子は彼の腕を自分の肩に回させて、担ぐような格好になっている。

「俺と結婚するより、ジジイの愛人をするほうがいいんだと」

道中、央人はぼつりぼつりと話し始めた。

日菜子と同じく、彼も今日は同僚との飲み会に参加をしていたらしい。

途中で電話が入り、店の外に出て応対していたところ、中年男性と寄り添って歩く婚約者と遭遇してしまったのだそう。

「彼女がそう言ったんですか？」

「聞いたしたら、割とあっさり」

央人を見た婚約者は取り乱していたが、終始隣に立つ人物のことを気にしていたという。

問い詰めた結果、相手は取引先の重役で、妻子持ち。それを承知の上で、長年愛人関係にあるこ

とを認めたそう。

はあ、と吐き出した央人の息が頬に触れる。

しかも彼女は、『私をずっと支えてくれたのは、央人でなく彼だ』と、謝ろうともしなかったという。だから、その場で婚約を解消しようと告げたのだそう。

「ひどい話ですねえ」

「ある意味、俺も彼女に相当ひどいことしてたから、いいんだ」

「え!？」

まさか央人も浮気三昧……なんてことはないと思いたい。

「結婚なんて、世間体を取り繕うためのものだと考えてた。お互い仕事第一で都合がよかったから彼女を選んだまでで、愛とか恋とか甘い感情からじゃない」

「そう、だったんですか……」

もしかしたら央人の婚約者は、そういう想いに気づいていて寂しかったのかもしれない。だからと言って、許される行為ではないが。

「彼女も同じように思っている節があるとかわかってはいたけど、さらに計算高かったみたいだ。とはいえ、まさか自分が天秤にかけられて、条件面で負けるはずないと自惚れてた」

央人の婚約解消の裏側には、日菜子にはわからない大人の世界が広がっているようだ。

計算、天秤、条件——？

どの言葉も、「結婚」という幸せなイメージには似つかわしくないように思える。

それにしても……相手の男性を見てはいないが、央人と天秤にかけて目移りするような存在なんているのだろうか。

相手は随分年上のようなので、たんまりお金を持っているとか？

でも、央人だって社内一の出世頭だ。

——ハマチがブリになるまで、もう少し待てばよかったのに。それに……

「ハマチはハマチで、美味しいんですけどねえ」

日菜子は思わずクスリと笑った。

意味不明なことを呟いた日菜子に央人は、のしっと体重をかけてきた。

「恥ずかしい奴だろ、俺って。こんな恋愛しかしてきていなくて」

「私なんて、この年まで誰とも付き合ったことがないんですよ？ 確かにいい別れ方じゃなかった

かもしれないが、恋愛経験があること自体、羨ましいです」

「……そうか？」

さっきまで央人の話を聞いていたはずなのに、気づけば日菜子は自分の想いを彼にぶつけていた。

「羨ましいのは、それだけじゃありません。藤崎さんは今回の結婚に愛や恋はなかったと言ったけど、こんなになるくらいショックだったんでしょう？ つまり、その人のことが好きだったんだと思っ

思うんです」

「うーん、どうかな？ どっちにしても俺、結構惨めだと思うけど」

自嘲気味に笑った央人の言葉を、日菜子は強く否定する。

「そんなことない！ あなたに想われていたなんて、元カノさんは幸せすぎます。藤崎さんは私なんかじゃ手が届かない、魅力的な人だから」

「……そうかな？」

「そうです！」

ストレートに断言すると、央人はふっと柔らかく笑った。

「君も、十分魅力的だよ？」

「見え透いたお世辞は無用です。私なんか、好きになった人に女としても見てもらえなかった」
自分にもっと魅力があれば、未来はきつと違っていただろう。

故郷を離れたのは、なにかを変えたかったからかもしれないし、逃げ出しただけなのかもしれない。

「私にも、誰かい人が現れないかな……」

「だったら試しに、俺と付き合ってみる？」

思考が一瞬フリーズした。弾かれたように顔を上げると、至近距離で央人と視線が交差する。

自分を熱っぽく見つめる瞳を——日菜子は真に受けなかった。

「冗談は、やめてください」

いくら非モテ女子でも、酔っ払いの戯言を信じるほど愚かではない。それに今は、ただ人恋しい

気分なだけなのだ。

央人を真っ直ぐに見つめ返して、日菜子にはこりと微笑んで見せる。

「私なんかで妥協しなくとも、藤崎さんはこれから幸せになれますよ。人生は山あり谷あり、悪いことのあとにはいいことがあるって、おばあちゃんが言っていました」

それは日菜子が落ち込んだときに、祖母がくれる魔法の言葉だ。

彩美物産の内定をもらったとき、祖母はとても喜んでいて。失恋したことは知らなくとも、最近の孫娘に元気がないことはわかっていたのだろう。

「きつと藤崎さんにはこれから、いいことがあります。その幸せをしつかり掴んでくださいね」

央人に伝えるふりをしながら、本当は過去の自分を慰めていたのかもしれない。

「……俺の、幸せ」

ぼんやり呟いた央人の言葉を聞き、日菜子は大きく頷いた。

「はい。立ち上がって、また前を向いて歩き出したら幸せはやってきます」

自信を持って断言し、日菜子は笑う。

すると央人が小さく「そうだね」と言ったから、魔法の言葉は、きつと彼の心にもなにかを残したと思うことにした。

「藤崎さん、着きましたよ」

彼の住んでいるマンションは、偶然にも日菜子のアパートの近くだった。

ここまで勢いで来たが、長く歩いたせいで日菜子の酔いはすっかり醒めている。

央人は今にも眠りに落ちそうで、問いかけにも反応が薄い。ごによごによと返答する央人の内ポケットから鍵を取り出した。

立派なエントランスや上層階へのエレベーターに緊張しながら、玄関ドアを開ける。

「お邪魔します……」

真っ暗な部屋の中に呼びかけた。

「藤崎さん、靴を脱いでください」

「ん……」

「ごそごそと靴を脱ぎ、暗い廊下を慎重に進む。リビングの壁をまさぐってスイッチを押したら、メインの照明ではない小さな明かりが灯った。

開きっぱなしのドアの向こうにベッドが見えて、そこまで運び彼を寝転ばせる。ここまで来たからには、最後まで面倒を見るのが筋だろう。」

謎の責任感に駆られた日菜子は、我知らず浮かんでいた額の汗を手で拭い、央人の隣に正座する。ネクタイを緩めて首から外し、水分を含んだ重いジャケットも剥ぎ取った。

眠ってしまったのか、央人は上着を脱がせるために身体を揺らしても起きない。

「藤崎さん。風邪、引きますよー？ 脱がせますよー？」

遠慮がちに声をかけながら、今度はワイシャツのボタンに手をかけた。

しどに濡れたシャツは、彼の身体に張り付いている。ボタンを外すごとに露わになつていく素肌から男の色香を感じて、日菜子は軽い目眩を覚えた。

——なんだか、寝込みを襲っているような気分。

指先に触れる厚めの胸板、引き締まった腹筋や浮き出た腰骨のラインが艶めかしくて、思わず唾を呑み込んだ。

ちよつと触つてみたいな、という邪念を振り払いつつ、日菜子は央人の上半身を裸にした。さすがにズボンで脱がせるのは憚られたので、靴下だけを引き抜く。

脱がせた衣服を抱えてベッドから下り、寝室を出た。

隣室の広いリビングは、きちんと整えられていた。

ひとり暮らしの男の人の部屋は、もつと雑然としているイメージがある。もしかしたらここを綺麗に片付けたのは元婚約者かもしれないと思い、胸が苦しくなった。

これ以上、自分にできることはない。そう考えて、衣服を脱衣所にあつたかごの中に放り込み、もう一度央人のいる寝室に足を踏み入れる。

「藤崎さん、私、帰りますね」

返事は期待せずに問いかけた。それから先ほど拝借した家の鍵を手近な場所へと置く。

最後に、よく眠っている彼の様子を確認してから立ち去ろうとしたとき、伸びてきた手に腕を掴

まれた。

「え……!？」

視界がぐらりと反転して、背中に柔らかな衝撃を受けた。目を丸くする日菜子の上には、央人が覆い被さっている。

「そばにいてくれるんじゃ、なかったのか？」

心臓を射貫かれたような衝撃を受けた。

暗闇でもわかる強い眼差しから、目を離せない。

「ま、待つて、藤崎さん！ 私——」

正直こういう展開に憧れていた節もある。しかし実際に我が身に起こると、金縛りにでもあつたかのように身体が動かない。

やつとの思いで声を絞り出し、彼の裸の胸に手を当てて押し返そうとした。だが、その手は強い力に阻まれて、シーツの上に縫い付けられてしまう。

「——帰るなよ」

抵抗は、できなかった。

ゆっくりと彼の顔が近づいてくるのを、瞬きもせずに見つめることしかできない。

「んっ……」

熱い吐息が唇を掠めたと思った次の瞬間、柔らかなものが押し当てられた。下唇を、しつとりと

した唇に挟まれ、舌先で舐められる。

くちゅくちゅという唾液の音が鼓膜を震わせて、頭の中が白く霞んでいく。

「ん……、うんっ!？」

唇の隙間から、ぬるりとしたなにかが入り込む。

初めての感触に日菜子は驚き、反動で拘束された手にぐつと力を込める。すると彼は、指と指を絡めながら日菜子の手を強く握った。

「……ん……ん……」

柔らかくて少しざらざらした彼の舌が、奥で縮こまっていた日菜子の舌の根元に巻き付く。それから、しごき上げるみたいにゆっくりと上下した。

多分これが、ディープキスというやつだ……

強引にされているはずなのに、深く交わるような優しいキスに、日菜子は次第に夢中になっていった。息をするのも忘れて、求められるままに舌を伸ばす。

ようやく唇が離れたときには息が上がリ、身体中から力が抜けてしまっていた。

いつの間にか服の下に入り込んだ彼の手に、素肌を直接触られる。日菜子の身体がビクリと大きく跳ねた。

「……嫌？」

至近距離にある央人の瞳が、不安そうに細くなる。

「嫌、というか……」

——付き合っても、いないのに。

彼が恋人と別れて、まだ数時間しか経っていない。

「彼女は、いいんですか……?」

今はただ人恋しいだけで、日菜子を求めているわけではないとわかっている。

——だけど、そんな顔をされたら、拒めないじゃないですか……

恋愛経験はないが、目の前の瞳に揺らめく情欲がはつきりとわかる。できるなら、その強い炎に焼き尽くされてみたいとさえ思う。

お酒の酔いは醒めたと思っていたのに、また別のものに酔ってしまったみたいだ。

「彼女のことは……自分でも驚くけど、もう終わったことだと割り切れた。それより今は」

——君が欲しい。

耳元で熱っぽくささやかれて、考えるよりも先に答えは出ていた。

ちゅ、と触れるだけの軽いキスが唇に落とされる。

見上げた先では、央人が蕩けるような笑みを日菜子に向けていた。

「とびきり優しく抱くから、君のすべてを俺にちょうだい……?」

もう一度唇が落ちてきたとき、日菜子の心からは一切の迷いが消えていた。

夜半を過ぎて強くなった雨音と競い合うように、激しくベッドの軋む音が響く。

「あつ、いや、痛……っ、ふじ、さ……あ、あん……っ」

裸にされて、至る所に口づけを受ける。蕩けるような愛撫に、日菜子は夢中になった。

けれど、彼の指が未開の淫路に触れると、快感だけとはいかなくなる。深く潜ろうとする指を、無意識のうちにぎゅうぎゅう締め付けてしまう。おまけに痛い。

「頼むから、もう少し、力を抜いて……」

大きな手が日菜子の頭を優しく撫でも、その心地よさを感じる余裕はない。

「や……っ、無理……は、んん……っ、あつ、ああっ」

枕に埋めた顔を、いやいやと横に振る。

力を抜けと言われても、身体が硬直してしまう。引き裂かれるような痛みと突き上げてくる圧迫感に耐えるだけで精一杯だ。

「大丈夫だから、落ち着いて」

持ち上げられた手を、彼の首のうしろに回される。

胸の膨らみを揉まれながら、硬く尖った頂を指で擦られていると、不思議と痛みが和らいでいくような気がした。

「あ、んっ、あ……ふじさ、き……さ、あつ、ああんっ」

——身体の強張りが解れて、一番深いところで繋がる頃には、もうなにも考えられないくらい

に溺れていた。

数時間後。

外が明るくなる前に、日菜子は目を覚ました。

興奮状態から冷めたせいとか、下半身の痛みを鮮明に感じ、昨晚の出来事は現実だと教えてくる。

秘かに懂っていたとはいえ、ほとんど面識もない人と一夜をともししてしまうなんて。そんな大胆な行動が自分にできるとは思ってもいなかった。

ふと隣を見ると、央人が静かな寝息を立てている。

穏やかな寝顔を見ていると、なんだか照れくさくなってきた。これを機に、二人の仲がどうこうなるとは思っていない。しかし、知り合うきっかけくらいにはなっただろうか。そんな淡い期待を抱き始めたとき——

央人が、わずかに身じろぎする。

「……セリ……」

昨日は愛おしかったはずの声が、絶望的に響いた瞬間だった。

それから彼は日菜子に背を向けるように寝返りを打つと、ふたたび寝入ってしまう。
「セリ」というのは、別れた彼女の名前のだろう。

——昨晚の彼は、人恋しかっただけ。ようやく日菜子は、現実を思い出した。

彼が自分なんかを選ばうけないと、わかっているつもりだった。

それなのに必要とされているように感じて、また勘違いしそうになるなんて。

日菜子は猛烈な恥ずかしさに襲われて、即座にベッドから抜け出した。衣服を身につけ、数分後には彼の部屋も出る。

この一夜に関して日菜子は、ベッドインだけでなく、逃げ足だって早かった。

後日、会社の廊下で央人とすれ違った。

しかし彼が日菜子を見ても、反応することはない。きっと彼は、あの夜のことをなにも覚えていないのだろう。

だったら自分も忘れるべきだ。日菜子も、一度はそう考えた。

ずっと好きだった人には振られ、初体験の相手には忘れられ、自分は余程恋愛には恵まれない星のもとに生まれたいらしい。

だけど、芽生えてしまった気持ちは消えない。

初体験をした身体の痛みは消えても、彼を想う気持ちだけは消えずに残っている。

あの日、日菜子は完全に恋に落ちてしまった。

違う誰かを想っていても、彼に求められたことが忘れられない。

運命の悪戯によって、決して交わることがないと思っていた彼の人生に、一瞬だけが交差して

しまった。

望みはないとわかっているのに、もう引き返せない――

だから、自分の諦めがつくまでは、何度でもアタックし続けようと決めたのだった。